

ポスターセッション

大学の教育力を発信する

3月5日（日）

11：00－15：30（コアタイム 12：00－13：30）

教養教育共同化施設「稲盛記念会館」 1階・2階 廊下

（掲載は学校名五十音順）

FDに関する情報収集、参加者間の交流を目的として、ポスターセッションが行われました。大学コンソーシアム京都加盟大学・短期大学の教員・職員・学生が、所属大学の特徴的なFDの取り組みを発表しました。

1. 京都外国語大学・京都外国語短期大学

テーマ	外国語自律学習支援室 NINJA におけるアドバイジングの取組				
発表代表者	河野 弘美				
連名発表者	高橋 恵子	井ノ口 まりこ	小林 洋貴	花本 知子	坂本 季詩雄
	近藤 睦美	ラシェル メイヤー	村上 正行	石川 保茂	
キーワード	アドバイジング		自律的学習		
	外国語学習		学習支援		
発表の概要	京都外国語大学・京都外国語短期大学では、自律的な学習者の育成を目的として、外国語自律学習支援室 NINJA (Navigating an Independent Non-stop Journey to Autonomy) を 2014 年に設立した。NINJA では、アドバイジングセッションやスピーキング・ライティングセッション、ワークショップ、Have a Chat など、目的に応じたプログラムを用意し、学生の自律的学習を支援している。本発表では、3 年間の NINJA における学習支援、特にアドバイジングの取組について紹介する。				

外国語自律学習支援室NINJAにおけるアドバイジングの取組

河野弘美* 高橋 恵子*** 井ノ口まりこ*** 小林洋貴*** 花本 知子** 坂本 季詩雄**
近藤睦美** ラシェル メイヤー** 村上正行*** 石川 保茂**

*京都外国語短期大学
**京都外国語大学外国語学部
***京都外国語大学 マルチメディア教育研究センター

概要

外国語自律学習支援室NINJA(Navigating an Independent Non-stop Journey to Autonomy)は、本学5ヶ年計画(中期計画)の一環として、平成26年4月1日に設置された外国語を通じて自律学習者を育成する施設である。そのミッションは、「学習者誰もが自律学習者になるための能力を備えているということに対する『気づき』を、学習者に与えること」である。本報告では、NINJA運営体制を紹介し、アドバイジングの目的や実施例、利用者の声、利用状況、ラーニングアドバイザー研修、アドバイジング以外のセッション等との連携について説明する。

運営体制

スタッフ

- 専任 ラーニングアドバイザー 1名(NINJAに常駐)
- 兼任 ラーニングアドバイザー(日本人) 5名(シフト制)
- 兼任 ラーニングアドバイザー(外国人) 6名(シフト制)
- 専任職員 2名 (NINJAに常駐)
- マルチメディア教育研究センター所属教員 1名
- アルバイト学生(日本人・留学生) 数名

- 副学長を委員長とした運営委員会を設置(年2回)
- 基本的な方針を決定
- 室長を中心に数名の教職員で定例ミーティングを開催
- 日々の問題点などについて情報を共有した上で対応

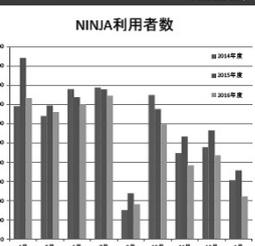




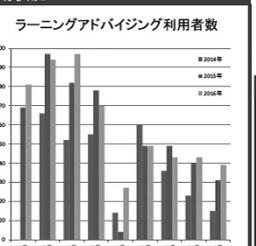
アドバイジングの目的	アドバイジングの例 & 利用者の声	他のセッション&イベントとの連携
<p>予約制:45分 使用言語:日本語のみ</p> <p>学習者の個性、ニーズに適した学習方法についてラーニングアドバイザーとともに考える学習支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アドバイザーはサポート役、アドバイス提供者ではない ・誰もが自律学習者になる能力を備えているということへの「気づき」サポート ・自律的学習習慣の確立サポート ・学習の目標達成への計画サポート ・時間管理、「逆算力」のサポート ・振り返り能力育成のサポート 	<p>アドバイジングの流れの例(1セッション)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習者の話(希望、目標等)を聞く ・学習の希望や目標を達成するために必要な条件や障害となる話を聞く ・目標達成後の自分を想像する ・目標達成に向けた計画を立てる <p>利用者(学生)からの意見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・TOEICの勉強&目標設定方法が解った ・自分自身と向き合える機会になった ・勉強のモチベーションが上がる ・不安とやりたいことの整理ができた 	<p>スピーキング & ライティングセッション</p> <p>予約制:25分 使用言語:英語のみ</p> <p>アドバイザー:外国人教員</p> <p>ラーニングエリアでのイベント & ワークショップ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ハロウィン、クリスマスイベント ・Have a Chat ・Language Exchange イベント ・ワークショップ:TOEIC, IELTS等 (一部エリア外でも実施)

NINJAの利用状況

NINJA利用者数



ラーニングアドバイジング利用者数



ラーニングアドバイザー研修

年1回(1月)のアドバイジング研修
年2回(7月と1月)のアドバイザーの振り返り研修
専任アドバイザーとの個別ミーティング

- ・ログシートの共有
- ・気づきファイルの共有
- ・補助資料作成と改善

2. 京都華頂大学・華頂短期大学

テーマ	京都華頂大学・華頂短期大学の授業改善の取組 —学生の評価をどのように授業に反映させるのか—	
発表代表者	松尾 章子	
連名発表者	堀出 雅人	浅田 瞳
キーワード	授業評価	インタビュー調査
	アンケート調査	
発表の概要	<p>本学教育開発センターでは、学内のさまざまな教育開発や授業改善に関する研究を進めており、本年で4年目にあたる。2016年の公開授業では、春期に通常通り、教員から立候補を募り、17の授業を公開した。秋期については、これまでと異なり、授業評価が高く、講義形式の授業を行っている教員からセンターから依頼を行った教員2名の授業を公開した。その時に受講生である学生にアンケート調査（悉皆）およびインタビュー調査（任意）を行い、学生は授業をどのように評価しているのか、それを受けて、教員はどのような授業を展開しなければならないのかについて、調査結果をもとに発表を行う。</p>	

京都華頂大学・華頂短期大学の授業改善の取組 —学生の評価をどのように授業に反映させるのか—

○松尾 章子(華頂短期大学 准教授 教育開発センター 専任研究員)
○堀出 雅人(華頂短期大学 講師 教育開発センター 専任研究員)
浅田 瞳(華頂短期大学 講師 教育開発センター 主事)

1. 公開した授業の選定方法

本学の公開授業については、過去のFDフォーラムのポスターセッションにおいても発表を行ってきたが、2016年度春学期についてはこれまでと同様に学内から立候補を募り、秋学期については次の方法で選定をおこなった。

以下の条件に当てはまる教員にセンターから依頼

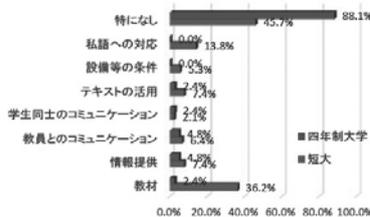
1. 授業評価の総合満足度が4.0以上(最大値5)
 2. 講義形式であること
 3. 40名以上の学生が履修している
 4. 後期の授業を担当されている
- 11/20(月)に公開授業を実施したときに履修者全員にアンケート調査を、授業終了後に履修している学生から4名ずつ依頼し、インタビュー調査を実施している。

2. 対象となる授業についての概要

- 短期大学
 ・2016年度秋期「保育相談a」(短大2回生)
 ・2016年度履修者 109名(アンケート回収は94名)
- 四年制大学
 ・2016年度秋期「養護原理」(大学1回生)
 ・現代家政学部児童学コースの学生が履修
 ・2016年度履修者 46名(アンケート回収は42名)

3. アンケート調査から

大学と短大で履修者に50名近い差があること、入学したばかりの大学1回生と、卒業を目前に控えた短大2回生であるため、学生に温度差があるため、単純な比較はできないが、ここでは学生が求める授業の違いを明確にするため、それぞれを100とするクロス集計の結果から、考察を進めたい。



3-1. 授業の改善点

アンケート調査では、この授業で工夫してほしいことに複数回答で答えてもらったが、これをみると、昨今のアクティブラーニング型の授業にみられるような「学生同士のコミュニケーション」について、工夫してほしいという学生がどちらにおいても少ないことが分かる。むしろ「教材」(大学:2.4%、短大:36.2%)や「情報提供」(大学:4.8%、短大:7.4%)、「私語への対応」(大学:0%、短大:13.8%)といった従来の学習方法に対する工夫を求める学生の姿が確認できた。この傾向は短大において強いことがうかがえた。

一方で「特になし」(大学:88.1%、短大:45.7%)と授業に対しておおむね満足している学生の姿も確認できた。これは2つの授業がどちらも学生の満足度の高いものであったことに起因するものであろう。

3-2. 学生が指摘する改善点

ここでは改善点が必要と答えた「教材」「私語への対応」についての結果から考察を進める。どちらの項目においても、短大での満足度は高くない。しかし、この2つについては、FD等の研修を行うことにより数値の上昇が期待できる項目であり、教員自身の研修によって授業改善が可能だと考えられる。

表1 この授業で用いられた教材は授業の理解に役立った

	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	とてもあてはまる
短大	n	1	20	64
	%	1.1%	21.3%	68.1%
四年制大学	n	0	2	26
	%	0.0%	4.8%	61.9%

表2 この授業は集中しやすい環境が保たれていた

	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	とてもあてはまる
短大	n	4	29	57
	%	4.3%	30.9%	60.6%
四年制大学	n	0	0	23
	%	0.0%	0.0%	54.8%

3-3. 本学の学生からみられる課題 到達目標の達成

評価の高い授業を選択したにも関わらず、到達目標を達成したと答えた学生(大学:54.7%、短大:67.0%)は決して多くない。短期大学の学生に多く「あてはまる」が、これは卒業を目前に控えた短大2回生であることと無関係ではないと考えられる。しかし、授業の到達目標は回生にかかわらず、すべての学生がきちんと把握しなければならないことは自明である。選択した授業においては、どちらも初回の授業で到達目標や評価基準について説明がされているため、学生全体に支援が必要であろうと考えられる。

表3 私はシラバスの到達目標を達成できた

	あまりあてはまらない	ややあてはまる	とてもあてはまる
短大	n	31	61
	%	33.0%	64.9%
四年制大学	n	19	20
	%	45.2%	47.6%

4. まとめにかえて

今回の調査では、本学で比較的高い評価の授業においてアンケート調査を実施した。左図で表したように伝統的な教授方法である「教材」「私語への対応」については、教員研修等で技術的な問題はカバーできる部分が大いにあるため、学生から意見が出されることにより授業改善しやすい項目であるといえる。

一方で、到達目標の達成は、どの教員であっても初回の授業で学生にシラバス等を参照して告知しているにもかかわらず、「この授業で何ができるようになるのか」把握していない学生は少なからなかった。

以上の結果から、本学が取り組むべき課題として初年次教育の必要性が浮上した。大学であれ、短期大学であれ、入学時に「大学とは何か」という学生の疑問に答えるための明確な授業として、1年次の基礎ゼミがある。しかし、必ずしも「大学生としてのシラバスの読み方、到達目標の理解、図書館の利用方法、レポートの作成といったことを全学的に学ぶ時間とはなっていない。教員間の温度差を抑制するための活動が必要だと考えられる。

3. 京都光華女子大学

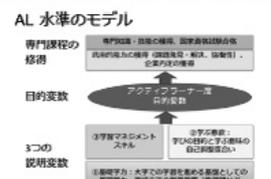
テーマ	アクティブラーナー水準のアセスメントを活用した個別学習指導				
発表代表者	藤田 大雪				
連名発表者	酒井 浩二	阿部 一晴	乾 明紀	小澤 千晶	吉田 咲子
キーワード	学習成果の可視化		アクティブラーニング		
	個別指導		学習支援		
発表の概要	<p>京都光華女子大学では、27年度から学生のアクティブラーナー水準を測定するアセスメント（AL水準調査）を開発している。2年目を迎えた28年度は、引き続き学生へのアンケート調査を行うとともに、調査結果を記した個人票と、水準向上のヒントとなるセルフチェックシートを開発して個別面談に活用するなど、調査を活用するための体制づくりを進めている。本発表では、28年度に実施したAL水準調査の分析結果と、その信頼性の評価について報告する。さらに、試験的に実施した個別面談の方法と結果を報告して、次年度以降を見据えた調査の活用方法を示す。</p>				

アクティブラーナー水準のアセスメント を活用した個別学習指導

Koka's Heart 藤田大雪・酒井浩二・阿部一晴・乾明紀・小澤千晶・吉田咲子
(京都光華女子大学)

はじめに

京都光華女子大学では、AP（大学再生加速プログラム）の助成を受けて、27年度から学生のアクティブラーナー水準（AL水準）を測定するアセスメントを実施している。



本発表では、このアセスメントについて、以下の二点を報告する。

- ①AL水準調査の妥当性について
- ②調査結果を利用した個別面談の概要

1. AL水準調査の妥当性

本学キャリア形成学科の全学生(186名)を対象に、AL水準調査を実施した。実施時期は28年10月から11月、回答者数は158名（回答率85%）であった。調査により測定したAL値を、

- ①GPA
- ②学習ステーション（学習支援センター）の利用頻度
- ③本人の実感

と比較し、妥当性の検証を行った。GPAとの相関係数は0.320 ($p<0.001$)と、強い相関があった。

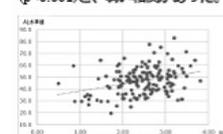


図1 GPAとの比較

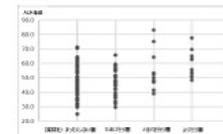


図2 学習ステーション利用頻度との比較

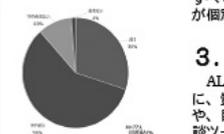


図3 本人の実感との比較

AL水準は、学習ステーション利用頻度、および本人の実感とも相関が見られた。これにより、本AL水準調査に一定の妥当性があることが確認できた。

2. 調査結果を利用した個別面談

AL調査の結果を学生に還元するため、試験的に、学生のふり返りとメタ認知の促しを目指した30分間の個別指導を行った。

まず、29年2月2日にAL調査の結果を記載した個別票を返却し、同時にリフレクションシートとチェックリストにより個別票の分析をさせた。



個別票のサンプル

その上で、できるだけ対象者の属性がばらつくよう、各学年から多様な学生4名ずつを候補に選び、最終的に面談を引き受けてくれた学生10名に対して個別面談を行った。

面談に際しては、一年間の学習行動についてできるだけ多くの情報を聞き出し、それに関する反省を促すこと、および次年度の目標を立てさせ、そのために何をすればよいかを考えさせることを第一に考えた。主な質問項目と回答は以下の通りである。

- ・個別票のAL水準値は実感に合うか
 - 実感に合う (9名)、合わない (1名)
- ・個別票を使った面談は役に立ちそうか
 - 役に立つ (8名)、役に立たない (2名)
 - （「テーマが決まっていたので個別票なしの面談よりよかった」、「面談のおかげで個別票の意味が理解できた」、「数字があると話がしやすい」など）
 - 現時点では分からないが意味はありそう (2名)
- ・この一年間どのようなことを頑張ったか
- ・（数値が下がった項目について）下がった理由は何だと思うか、上げるために何をすればよいか
- ・（数値が上がった項目について）上がった理由は何だと思うか
- ・来年の目標は何か、そのために何をすればよいか

面談により、学生から一年間の学習行動について詳細な情報を聞き出すことができ、その対策も考えることができた。すべての学生が面談を肯定的にとらえたことから、AL調査が個別学習指導に有用であることが示されたと言える。

3. 今後の活用計画

AL調査を利用した個別指導の取組拡大を目指す。そのために、質問項目や回答欄を記した面談者用の記録フォーマットや、目標や学習行動を記載する学生用記録紙など、各種の面談ツールを開発し、APの年次計画を着実に履行していきたい。

28年度

- ・妥当性の検証
- ・個別指導の試験実施

29年度

- ・個別指導ツールの開発
- ・キャリア形成学科222生全員への個別指導実施

30年度

- ・個別指導の実施拡大

28年度以降のAL調査の実施計画

4. 京都光華女子大学

テーマ	こども教育学科幼児教育コース初年次教育用サブテキスト 『子どもと共に歩む保育』の出版と活用による科目間連携			
発表代表者	和田 幸子			
連名発表者	伊藤 美加	下口 美帆	菅井 啓之	田中 慈子
	智原 江美	鍋島 恵美	松本 しのぶ	山崎 玲奈
キーワード	保育者養成教育		科目間連携	
	サブテキスト		授業試案	
発表の概要	平成 27 年度より四年制となった本学保育者養成課程では、初年次教育から専門教育への接続をテーマとした教育改革に取り組んでいる。そのために、①保育者養成教育の多岐に渡る科目間の連携をする ②京都光華女子大学こども教育学科幼児教育コースの学びを包括することを目的に、幼児教育コースサブテキスト『子どもと共に歩む保育』を作成、出版し、活用していくことにした。初年次より各授業のサブテキストとして使用し、各教員は他教員の執筆内容もふまえて科目間連携しながら、各授業の特異性を発揮したいと考えた。このサブテキストを 4 年間何度も繰り返して使用することによって、読み手である学生が「こども」「保育」「教育」について総合的に考え、保育者として自律的に育つことを目指す。平成 29 年 3 月発刊するに至る過程を整理し、今後、各授業でサブテキストとして使用するにあたり、科目間連携のための授業試案を提示する。			

こども教育学科幼児教育コース初年次教育用サブテキスト
『子どもと共に歩む保育』の出版と活用による科目間連携

京都光華女子大学 こども教育学科
和田幸子、伊藤美加、下口美帆、菅井啓之、田中慈子、智原江美、鍋島恵美、松本しのぶ

目的
 ① 保育者養成教育の多岐に渡る科目間の連携をする
 ② 京都光華女子大学こども教育学科幼児教育コースの学びを包括することを目的に、幼児教育コースサブテキスト『子どもと共に歩む保育』を作成、出版し、活用していくことにした。

目次

- 1. 子どもの心と保育
- 2. 保育者の役割と保育
- 3. 保育者の働き方と保育
- 4. 保育者の心と保育
- 5. 保育者の成長と保育
- 6. 保育者の未来と保育

このサブテキストは、初年次教育から専門教育への接続をテーマとした教育改革の一環として、保育者養成教育の多岐に渡る科目間の連携を図ることを目的に作成された。本書は、保育者養成教育の多岐に渡る科目間の連携を図ることを目的に作成された。本書は、保育者養成教育の多岐に渡る科目間の連携を図ることを目的に作成された。

セブンスター

5. 京都産業大学

テーマ	受講生の成長を支える学生ファシリテータ ～授業支援の実践報告～				
発表代表者	上住 祐介				
連名発表者	大橋 龍太郎	大森 浩希	濱名 未佳	大谷 麻予	鈴木 陵
キーワード	学生ファシリテータ			アクティブラーニング	
	F 工房			受講生の成長	
発表の概要	<p>京都産業大学では、アクティブラーニングを取り入れた授業が多く存在する。アクティブラーニングは、学生が主体的に参加することで深い学びに繋がられるものだが、グループワーク等が中心なので、グループによって学びの質に差が出る可能性がある。</p> <p>本学の学生ファシリテータ（ボランティア）は、受講生がグループワークが有意義な意見交換の場になるように支援する役割を担っており、現在 62 名で活動している。</p> <p>学生ファシリテータは、事前研修において、受講生同士では踏み出せない一歩を後押しするためのスキルやマインドについて学び、授業ではグループの様子を観察しながら、円滑な話し合いができるようサポートしている。</p> <p>また、受講生の学びを考えて、教員と学生ファシリテータが協力して授業運営を行っていることが本学の特徴である。</p> <p>本発表では、学生ファシリテータによる授業支援の実践例とその成果について報告する。</p>				

ポ
ス
タ
ル
シ
ョ
ン

受講生の成長を支える学生ファシリテータ 京都産業大学 ～授業支援の実践報告～

～学生ファシリテータ～外国語学部・上住祐介(3年次)、大橋龍太郎(3年次)
経済学部・大森浩希(3年次)、濱名未佳(2年次)
[F工房職員]大谷麻予、鈴木陵

①はじめに ※冊子①参照
「学生ファシリテータ」(通称、【学ファン】)とは、授業、課外活動においてのグループ作業を円滑に進めることを支援する学生ボランティアである。本報告では学ファン活動の1つである「自己発見と大学生活」における授業支援の実践例とその成果について紹介する。

②自己発見と大学生活 ※冊子②③参照
「自己発見と大学生活」は春学期に開講されるキャリア形成支援教育科目である。8学部の混成編成で約60名規模28クラスで開講されており、1年次のみ履修可能となっている。アクティブラーニング型の授業で、学ファンはこの授業において先輩学生として授業支援を行っている。



第1回 アイスブレイク



第2回 対話を通して知る自分



第3回 大学生活を調査する



第11回 合同クラスポスター発表

③学ファンになるための研修 (2016年度の場合)
学ファンは、活動するにあたって必要となるスキルを身に付けるための研修を受けることが必須となっている。

項目	研修内容
1 2/24(水)～25(木)	アイスブレイクを通してお互いを知る チームビルディングの基礎 フィードバックシートの書き方
2 3/8(土)	自己発見と大学生活の授業について学び アイスブレイク、グループ作業の進め方についての講習
3 3/15(水)	授業で使ったアイスブレイク、ワークの実際 学ファン活動することの必要なスキル、心構えを学ぶ 学ファンになるための発表

項目	研修	そのうち	どちらかとい うとそう思う	どちらでも ない	どちらかとい うとそう思わ ない	そのうち そう思わない	未記入
アイスブレイクワークの進め方 が授業で使われることが多 く、実践しやすくなることで中 学	100%	69%	19%	2%	12	0	
フィードバックシートを 書くことが授業で使われる ことが多	63.8%	35.8%	8.4%	1.4%	0.8%	0.0%	
グループワークの様子を 観察することが授業で使 われることが多	100%	69%	19%	2%	12	0	
自己発見と大学生活の 授業で使われることが多 く、実践しやすくなることで中 学	54.0%	36.3%	8.3%	0.9%	0.2%	0.1%	
授業で使われることが多 く、実践しやすくなることで中 学	48.3%	38.0%	13.2%	2.2%	10.2%	0.1%	
第3回アイスブレイクは 授業で使われることが多 く、実践しやすくなることで中 学	36%	34%	35%	3%	30%	1%	
第4回アイスブレイクは 授業で使われることが多 く、実践しやすくなることで中 学	49%	37%	18%	3.8%	1.8%	0.1%	
第4回アイスブレイクは 授業で使われることが多 く、実践しやすくなることで中 学	49%	37%	18%	3.8%	1.8%	0.1%	

調査期間(2016年7月18日～22日)受講生2281名中1913名が回答

④受講生から見た学ファン ※冊子④参照
「自己発見と大学生活」は春学期に開講されるキャリア形成支援教育科目である。8学部の混成編成で約60名規模28クラスで開講されており、1年次のみ履修可能となっている。アクティブラーニング型の授業で、学ファンはこの授業において先輩学生として授業支援を行っている。

第3回アイスブレイクは授業で使われることが多く、実践しやすくなることで中学

第4回アイスブレイクは授業で使われることが多く、実践しやすくなることで中学

第4回アイスブレイクは授業で使われることが多く、実践しやすくなることで中学

調査期間(2017年1月24日～2月13日)

⑤自己発見と大学生活の授業に学ファンが必要

授業員7名、受講生17名のインタビュー結果より

・身近な存在の先輩
・教員が一人の枠に比べ、受講生の様子を観察、把握出来る
→受講生の良い刺激になる

・学ファンがいれば、
「自己発見と大学生活」の授業ではない
・グループワークの進め方など、わからない
点から学生目線で共
感してもらえる

・身近な先輩がいて授業
運営がしやすい
・積極的に授業を盛り上げて
くれた

調査期間(2017年1月24日～2月13日)

⑥なぜ学ファンになろうと思ったか

なると思った理由	人数
経済学1年次(新履修ファン)	1人
大森の授業で学んだことが多かったため、学ファンになることに決めた。	1人
2年生だったので	4人
授業で使われる(学ファン研修)	2人
学ファンの授業を見て、楽しそうだったので自分もその輪に入りたいと思った。学ファンがなくてもいいから、楽しそうなら参加したいと思った。楽しそうなら参加したいと思った。	3人
先輩からの勧め	1人
学ファンとして活躍	1人
自己発見と大学生活の授業で使われることが多かったため、学ファンになることに決めた。	1人
学ファンになることに決めた。	1人

※インタビュー内容をカテゴリー別 ※匿名記名インタビュー調査より抜粋
※複数回答あり

⑦まとめ
以上の調査から学ファンの活動が受講生に大きな影響を与えていることが分かった。先輩学生として受講生の様子を見ながらアドバイスをし、その結果、グループワークが円滑に進行していた。また、第3～4回の授業での発表を通して大学生活のセリルとしての役割も果たしていたといえる。今後は、学ファン自身の更なる能力向上と共に、受講生の主体的な学びに繋がる活動を行う必要がある。

京都産業大学

359

6. 京都産業大学

テーマ	教職員によるアクティブラーニングのノウハウ共有 ～全学FD/SD研修会の事例～	
発表代表者	鈴木 陵	
連名発表者	大谷 麻予	
キーワード	アクティブラーニング	FD/SD
	授業運営ノウハウの共有	
発表の概要	<p>京都産業大学では、これまで数回にわたり「アクティブラーニング」をテーマに、教員・職員・学生間で議論を重ねてきた。本年度、教育支援研究開発センター F 工房では、授業見学や教員へのヒアリング調査を行い、本学で実践されているアクティブラーニングに関するノウハウをモデル化した冊子を発行した（「改訂版 アクティブラーニング事例集～本学の先生方による授業改善の実践例を紹介します～」）。</p> <p>さらに、本冊子で紹介した教員をはじめアクティブラーニングを実践している教員の授業運営ノウハウを教職員間で共有することを目的に、「平成 28 年度 全学 FD/SD 研修会（アクティブラーニングセミナー）～アクティブラーニングへの不安解消のためのご提案：本学教員による実践事例紹介～」を実施した。本発表では、研修会の概要と成果、ならびに今後に向けた課題について報告する。</p>	

教職員によるアクティブラーニングのノウハウ共有 ～全学FD/SD研修会の事例～

京都産業大学 教育支援研究開発センター

概要

京都産業大学では、これまで数回にわたり「アクティブラーニング」をテーマに、教員・職員・学生間で議論を重ねてきた。本年度、教育支援研究開発センター F 工房では、授業見学や教員へのヒアリング調査を行い、本学で実践されているアクティブラーニングに関するノウハウをモデル化した冊子を発行した（「改訂版 アクティブラーニング事例集～本学の先生方による授業改善の実践例を紹介します～」）。さらに、本冊子で紹介した教員をはじめアクティブラーニングを実践している教員の授業運営ノウハウを教職員間で共有することを目的に、「平成 28 年度 全学 FD/SD 研修会（アクティブラーニングセミナー）～アクティブラーニングへの不安解消のためのご提案：本学教員による実践事例紹介～」を実施した。本発表では、研修会の概要と成果、ならびに今後に向けた課題について報告する。

1. 学内のAL実践事例を収集【「改訂版 アクティブラーニング事例集」の作成、発行】

〈特徴〉

- 学内で実践されているアクティブラーニングに関するノウハウ共有を目的に冊子を作成
- 教員の紹介などを通じて実践事例の情報を収集、聞き取りおよび授業見学を実施
- 事例を「共通教育語学」「専門語学」「初年次ゼミ」「専門ゼミ」「講義」「学部が入学期・後に開催するオリエンテーション」「課外活動」の7つのカテゴリに分類し、授業のねらい、流れ、特長などをまとめて発行
- 教授会等で冊子を配布、webで公開

2. 研修会において教員が自らのAL実践事例を紹介【「全学FD/SD研修会」の開催】

〈特徴〉

- 学内教職員を対象に、AL実践事例を紹介
- 教員が登壇提供者となり、授業の事例を紹介（「講義科目」2名、「初年次ゼミ」「専門ゼミ」それぞれ3名）
- 教職員の立場を越えた意見交換の機会を設定

〈実績〉

- 参加人数：学内教職員39名（教員27名、職員12名）
- ※7学部から参加

紹介事例の一部：
「ハンドアウトやレポートを活用した講義の進め方について」（経営学部、文化学部教員）
「生命システム学科における導入教育の取組」（総合生命科学部教員）ほか

〈成果〉（参加者アンケート等より）

- (1) 多様な所属の教職員が参加、所属を越えて情報を共有し、影響を及ぼす機会に「他学部の先生の授業の工夫を聞いた」「講義授業展開のノウハウが参考になった。知識教示に陥りがちな理系科目にどう取り入れるか自問自答したい」「一般参加の先生方からも新鮮なアイデアを聞いた」
- (2) 教員/職員が、対等な目線で意見交換する機会が実現
- (3) 登壇者が研修後に所属学部教員全員に対し研修参加を推奨

3. 研修会の成果を学内に発信【「CERADES NEWS」の発行】

- 年数回発行している広報誌（主に学内教職員向け）の特集記事として掲載することで、学内に悩みや課題を共有できる場があることを知ってもらおう
- 研修参加者の声を中心に構成し、関心を持ってもらう

まとめ

- 教員の持っているAL運営のノウハウが、冊子によって可視化された
- 教員の持っているAL運営のノウハウを、教職員同士がフラットな関係性の中で学び合う機会ができた

今後の課題

- 学内のネットワークを広げ、「数珠つなぎ」で事例収集をさらに充実させる
- 今回の研修参加者を、次回以降は登壇者として巻き込んでいく仕組みをつくる


 びすんで、うみだす。
京都産業大学

8. 京都産業大学

テーマ	ミドルレベル（各学部・教育プログラム）の教育改革・改善に向けた取組	
発表代表者	山内 尚子	
連名発表者	森脇 可奈子	鈴木 沙代
キーワード	FD/SD	ミドルレベル（各学部・教育プログラム）
	教育改革	教育改善のスピード化
発表の概要	<p>京都産業大学では、今年度にFD/SD推進体制を再編し、副学部長クラスで構成する「教育支援研究開発センター運営委員会」を教育改革・改善のエンジンとして、ミドルレベル（各学部・教育プログラム）の教育改革・改善のスピード化・実質化に取り組んでいる。</p> <p>本発表では、その一環として平成28年度より運用を開始した「京都産業大学教育プログラム支援制度」等、教育の改革・改善を支援する全学的な制度を活用することにより見えてきた学部の特徴的な取組について紹介する。</p>	

ミドルレベル（各学部・教育プログラム）の教育改革・改善に向けた取組

京都産業大学 教育支援研究開発センター

概要

京都産業大学では、現在、副学部長クラスを中心としたミドルレベル（各学部・教育プログラム）の教育改革・改善のスピード化・実質化に取り組んでいる。

教育支援研究開発センターは、これまでに、それらの改革・改善を促すための全学的な仕組みとして、学部が定める重点テーマに基づいた調査やFD活動を支援し、各学部が抱える課題や注力すべきテーマの可視化・共有化に努めてきた。2016年度には、新たな試みとして、①全学的な波及効果が見込める試行的な取組に対する経費的な支援「教育プログラム支援制度」、②F工房による正課・正課外プログラムの開発に係るコンサルテーションや運営支援を行っている。

本発表では、これらの全学的な仕組みを提示しつつ、各学部の実情に沿った支援を行うことで見えてきた学部の特徴的な教育改革・改善に向けた取組について紹介する。

全学的な仕組み

学部授業・カリキュラム改善に向けた一貫性のあるFD活動と学部間での情報共有

＜効果＞

- 年間計画によって、学部のFD活動に一貫性が生まれ、学部のカリキュラム改善に結びつけられ取り組みが可能となった。
- 重点テーマを各学部が決定することで、学部の自主的なFD取組が芽生え、学部独自で企画したFDセミナーが積極的に実施されるようになった（外国語学部）。
- 各学部の取り組みを可視化することで、学部間で良い取組についての情報や課題解決のためのアイデアの共有が可能になった（運営委員会）。

事例① 教育プログラム支援制度（経費的支援）

本学の教育の質の向上と教育改革の推進のため、全学の重点テーマを提示して学内公募を行い、正課の教育プログラム・科目に係る基礎調査、試行的取組等の学内活動を認定して、学長裁量経費により支援する制度。
※2016年度採択プログラム：4件 総額2,000,000円

＜経済学部＞ 経済学の面白さを感じながらアカデミック・スキルの獲得を可能にする初年次教育教材の開発

- 大学での主体的な学びを深めるためのアカデミック・スキル（読む・書く・調べ、論じる、議論する）の不足
- 導入科目において、学部としての経済学の魅力を伝えられていない
- 初年次教育担当教員10名による教材開発
- 他大学とのプレゼン大会（ディベート経験とデータ分析能力育成の関連性を調査）
- 1～4年次合同の企業見学（学年による発達段階と情報を得る能力の違いを調査）

事例② F工房によるプログラム開発・運営支援

正課や名学部の新入生オリエンテーション等の正課外での取組について、より円滑に進むよう依頼者（教員・職員・学生）のニーズに合わせたプログラム開発・運営の支援を、F工房が中心となり行っている。
※F工房＝学生自治体学生生活支援センターに、教員と学生が共に参加・協働、教育実践に関するコンサルテーションやプログラムの開発を行っている。

＜現代社会学部＞ 新学部における入学前教育プログラムの開発支援 ※2017年4月開設

- 新入生のロールモデルとなる先輩学生がいらない。
- 附属高校からの入学予定者に、フアンリレーションの意義を身につけてもらいたい。
- 新しい入試制度、入学前・入学後の教育プログラムを試行して、学生の反応・学生が学んでいく過程を見たい。
- 学生フアンリテータの派遣・学生視点による提案
- 附属高校からの入学予定者向け入学前教育のプログラム開発支援

まとめと今後の課題

＜成果＞

- ミドルレベルの教育改革・改善を促すための全学的な仕組みは構築されつつある。
- 学部が抱える課題や注力すべきテーマに応じて、これらの支援を改革・改善のスタートアップに活用する学部が出始めている。

＜今後の課題＞

- 先駆的な学部の取組のプロセスが、運営委員会（副学部長クラスの委員会）等を通じて他学部と共有され、他の学部の教育改革・改善のスピード化・実質化にさらに波及するようはたらきかけていきたい。

教育支援研究開発センター FD/SD活動の推進体制

9. 京都三大学教養教育研究・推進機構
(京都工芸繊維大学・京都府立大学・京都府立医科大学)

テーマ	教養教育の大学間連携から生まれた学生交流				
発表代表者	野口 祐子				
連名発表者	林 哲介	石田 昭人	大倉 弘之	児玉 英明	藤澤 正典
キーワード	教養教育			学生交流	
	質保証			大学間連携	
発表の概要	<p>京都三大学教養教育研究・推進機構は、京都工芸繊維大学（国立）、京都府立大学（公立）、京都府立医科大学（公立）の三つの大学による大学間連携の組織であり、設置形態を超えた教養教育共同化の取組は全国初である。2014年度に、北山文化環境ゾーンに「教養教育共同化施設」を建設し、三大学の学生は、同じ教室で、正課授業として共同化科目を受講している。履修システムが「単位互換」から「共同化」へと進化したことで、大学間連携が実質化され、学生交流も一段と進んでいる。本報告では、「時代が求める新たな教養教育－京都モデルの発信－」を象徴する京都学プログラム、リベラルアーツ・ゼミナール、宿泊型研修を中心に取り上げる。</p>				

設置形態を超えた三大学が連携する「教養教育共同化」の取組は全国初!

京都三大学教養教育研究・推進機構

— 交流しながら学ぶ新しい学修空間を創出 —

教養教育の大学間連携から生まれた学生交流

共同化の経緯

三大学は、それぞれ100年以上の歴史を有する、国内で主要な有名人を輩出してきた歴史を有する。また、互いに隣接する立地条件から、交流の機会が豊富である。2011年度に、三大学の教養教育の連携を推進する「京都三大学教養教育研究・推進機構」が発足した。この機構は、三大学の教養教育の連携を推進する役割を担っており、三大学の教養教育の連携を推進する役割を担っている。

教育の目標

三大学は、それぞれ100年以上の歴史を有する、国内で主要な有名人を輩出してきた歴史を有する。また、互いに隣接する立地条件から、交流の機会が豊富である。2011年度に、三大学の教養教育の連携を推進する「京都三大学教養教育研究・推進機構」が発足した。この機構は、三大学の教養教育の連携を推進する役割を担っており、三大学の教養教育の連携を推進する役割を担っている。

Q. 教養教育共同化はどのように行われるのですか?

A. 三大学の教養教育の連携を推進する「京都三大学教養教育研究・推進機構」が発足した。この機構は、三大学の教養教育の連携を推進する役割を担っており、三大学の教養教育の連携を推進する役割を担っている。

Q. 共同化科目の履修はどのように行われるのですか?

A. 三大学の教養教育の連携を推進する「京都三大学教養教育研究・推進機構」が発足した。この機構は、三大学の教養教育の連携を推進する役割を担っており、三大学の教養教育の連携を推進する役割を担っている。

Q. 共同化科目の履修はどのように行われるのですか?

A. 三大学の教養教育の連携を推進する「京都三大学教養教育研究・推進機構」が発足した。この機構は、三大学の教養教育の連携を推進する役割を担っており、三大学の教養教育の連携を推進する役割を担っている。

京都三大学共同化教養教育のカリキュラム

人文学文化	人間と社会	人間と自然
<ul style="list-style-type: none"> 現代社会と文化 現代社会と文化 現代社会と文化 	<ul style="list-style-type: none"> 現代社会と文化 現代社会と文化 現代社会と文化 	<ul style="list-style-type: none"> 現代社会と文化 現代社会と文化 現代社会と文化

教養教育共同化施設「極証記念会館」

三大学の教養教育の連携を推進する「京都三大学教養教育研究・推進機構」が発足した。この機構は、三大学の教養教育の連携を推進する役割を担っており、三大学の教養教育の連携を推進する役割を担っている。

京都三大学合同交遊 集団による演劇

三大学の教養教育の連携を推進する「京都三大学教養教育研究・推進機構」が発足した。この機構は、三大学の教養教育の連携を推進する役割を担っており、三大学の教養教育の連携を推進する役割を担っている。

共同化科目を受講した学生の皆さんの声

三大学の教養教育の連携を推進する「京都三大学教養教育研究・推進機構」が発足した。この機構は、三大学の教養教育の連携を推進する役割を担っており、三大学の教養教育の連携を推進する役割を担っている。

京都三大学の立地関係

三大学の教養教育の連携を推進する「京都三大学教養教育研究・推進機構」が発足した。この機構は、三大学の教養教育の連携を推進する役割を担っており、三大学の教養教育の連携を推進する役割を担っている。

京都三大学 教養教育研究・推進機構

三大学の教養教育の連携を推進する「京都三大学教養教育研究・推進機構」が発足した。この機構は、三大学の教養教育の連携を推進する役割を担っており、三大学の教養教育の連携を推進する役割を担っている。

ポスツション

11. 京都市立大学

テーマ	PBL 授業「ケースメソッド・キャリア演習」の発表 テーマ：企業における女性活躍の方策		
発表代表者	淵上 紫乃		
連名発表者	田鹿 晴香	鳥海 彩音	宮川 玲子
	守本 有希	中山 未有希	土井 梨那子
キーワード	PBL 型学習		女性活躍
	社会人基礎力		企業連携
発表の概要	<p>京都市立大学の2年次生必修科目「ケースメソッド・キャリア演習」はPBL（Problem Based Learning：課題解決型学習）である。</p> <p>協力企業はビジネスレベルを意識した課題を設定し、学生グループが企画案・解決策を提示する。</p> <p>課題：企業における女性活躍</p> <p>協力企業：株式会社ロマンライフ</p> <p>(株)ロマンライフさんは洋菓子の製造販売を主たる業務としており、女性比率の高い会社であるが、管理職への女性登用は13%とまだ進んでいないようである。もともと女性社員比率の高い会社であり、女性社員の活用は重要なテーマとして認識しておられる。そこで、女性の社会進出とは何かという根本的な問いを意識し、先行他社の事例も研究して、(株)ロマンライフさんへの提案を行った。</p>		

ケースメソッド・キャリア演習 学生発表 京都市立大学

演習の狙い

- ・現場の事例を用いたケースメソッドによるPBLを行うことで、ビジネスマインドを養い地域社会に貢献する生き方・働き方を考える
- ・学部を越えたアクティブラーニングにより、幅広い視野、コミュニケーション力、問題発見能力、倫理的判断力、企画力、プレゼンテーション能力など、社会人基礎力を伸長する

実際のケースメソッド

- ・株式会社ロマンライフ様ご協力のもと「女性活躍」推進をテーマにした

既存の研修システム（ロマンライフ大学）に組み込む

問題の掘り下げ
問題の定義づけ
先進事例や関連法令の調査

Action
改善し再提案

Plan
基本方針決定

Check
意見交換

Do
具体策の提案

目標数値は的確か
定義の見直しが良い

社外研修制度
女性管理職割合の増加

ワークでの気づき

- ・様々な意見がある中で、エッセンスは何なのか
- ・対立する意見はどのように妥協点を探るのか
- ・ベストでなくてもベターな選択ができるか

授業での学びの活用（行動の変化）

- ・マスコミ報道を鵜呑みにせず、深く考えるようになった
- ・アルバイト先で社員さんの働き方を具体的に教えてもらった

【連絡先】
京都市立大学 キャリアサポートセンター 075-703-5764 担当 前田

12. 京都府立大学

テーマ	企業・団体との協同授業による社会人基礎力の伸長とその横展開 -京都府立大学・崇城大学の協同の取り組み-				
発表代表者	前田 武司				
連名発表者	松村 千鶴	藤田 崇	田上 寛美	藤本 元啓	辻田 祐純
キーワード	PBL			地域連携	
	社会人基礎力			地域貢献・震災復興	
発表の概要	<p>京都府立大学は2011年度から、地域社会に貢献する人材の養成を目標に「キャリア育成プログラム」を全学で展開している。2013年度からは地元企業・自治体と協同で2年次生必修科目「ケースメソッド・キャリア演習」において、本格的にPBL（Problem Based Learning：課題解決型学習）を導入した。企業・自治体からの生の課題に対して、学生はグループで企画案・解決策を提示する。</p> <p>また、熊本地震の被災地にある崇城大学では2014年度文部科学省「大学教育再生加速プログラム」テーマ1（アクティブ・ラーニング）の選定を受け、全学でアクティブ・ラーニングの取り組みを進めている。今年度、京都府立大学のPBLを参考に2年次生必修科目「キャリア基礎Ⅱ」において、地元企業の協力を得てPBLをスタートさせた。</p> <p>受講生に社会人基礎力を受講前後で自己評価させたところ、「チームで働く力」「考え抜く力」の伸長が統計的に確認できた。両大学の取り組み内容と横展開の方法、その教育効果等について報告する。</p>				

企業・団体との協同授業による社会人基礎力の伸長とその横展開

Kyoto Prefectural University SOJO UNIVERSITY

-京都府立大学・崇城大学の協同の取り組み-

科目の位置づけ

それぞれの科目のねらい

『ケースメソッド・キャリア演習』

- ① ビジネスマインドを養い地域社会に貢献する生き方と働き方を考える
- ② 社会人基礎力を伸ばす
- ③ 現場重視の課題解決を目指す

『キャリア基礎Ⅱ』

- ① 社会で求められる力とはどんなレベルか理解する
- ② 働くとはどういうことか体感する
- ③ どうすればチームへの貢献が最大になるか体得してみる

PBL型授業の構成

単元	内容	企業・団体	テーマ
1	ケースの紹介	企業社	日本の伝統文化の魅力を伝える社会貢献事業
2-3	グループ活動	協賛学校	季節の行事も仕事場を飾りこぼす(スクラップ)
4-5	中間発表/詳細レポート	社企業	10-17年産地産地産品(地元産品)の活用(地元産品)の活用
6	振り返り		
8-9	グループ活動	食品メーカー	ロングライフ商品の企画・開発(課題)の提案
10-11	最終発表/詳細レポート		
12	振り返り		

教育効果

① 文理合同なので文系と理系の発想の違いが面白い
② 企業の厳しさを体感した

どんな変化があったか

項目	増えた	減った	変わらない
目的ややるべきことは明確に やることが決まってもいい	35	120	84
いつも自分で考えて問題を 行動している	20	101	110
別に自分自身の成長を 感じようとしている	30	127	80

1番学んだことは?

項目	割合
主体的に 学ぶことの 楽しさ	32%
チームで 働くことの 楽しさ	27%
企業での 厳しさ	20%
社会で 求められる 力	13%
自分自身の 成長	8%

今後の課題

『ケースメソッド・キャリア演習』

- ① 教育力の高い企業様の確保
- ② より現場重視のプログラムの開発
- ③ 学生間のモチベーションの差

『キャリア基礎Ⅱ』

- ① グループは5名、クラスサイズは40名以下が望ましい
- ② 自己肯定感の低いグループほど「こなす」傾向が強い
- ③ 専門科目の学びにどうつなげるか

13. 京都薬科大学

テーマ	科学・技術 学修の促進を図る動画教材の開発と活用			
発表代表者	河野 享子			
連名発表者	高尾 郁子	大谷 有佳	千原 佳子	徳山 友紀
	平山 恵津子	小関 稔	木村 徹	北出 達也
キーワード	実験実習		薬学教育	
	moodle		アクティブラーニング	
発表の概要	<p>理系学部で従来から実施されている実験実習は、最も能動的な学修法の一つであり、その過程で学生は技能を習得し科学的思考や実験センスを醸成すると期待される。実験器具・機器の取扱方や実験操作を説明する際、学生 20~30 名に対し教員 1 名が対応する場合、実演では手元の操作が見え難く、学生の学修意欲や効果を低下させる原因となる。そこで学生実習支援センターでは実験手技の動画教材を作成し、教員が行う操作説明に活用した。また、実習中に動画教材を自由に視聴できる iPad を試験的に導入した。さらに、事前学習用動画教材を作成し、Moodle による配信を行った。これらの動画教材を活用した実習実施後アンケート調査の結果、アンケートに答えたほとんどの学生がこれらの動画教材は実験実習に役に立ったと回答した。</p>			

ポス
タ
ル
シ
ョ
ン



京都薬科大学 科学・技術 学修の促進を図る 動画教材の開発と活用

河野享子、高尾郁子、大谷有佳、千原佳子、徳山友紀、平山恵津子、小関稔、木村徹、北出達也 学生実習支援センター

■ 学生実習支援センター

学生実習支援センターは、4年制薬学部1~3年次生(1学年360名)、3年次の実験実習13科目を、各担当科目教員と協力して、準備、実施している部署である。

本センター教員は、専門分野にとらわらず実験実習すべてに係ることから、学生の科学・技術・態度学修の状況がわかり、その情報を教員だけでなく、事務職員とも共有し、連携して事業に取り組んでいることが特徴である。

我々は、日常的に学生の実験操作をみることから、実験器具や機器操作法の理解度は、実験精度や取り回しにも与える影響に比例すると考えている。特に、実験操作の情報が不足し、学生の不注意な後が軽減でき安全な実習につながることを考えた。

■ 動画教材の開発

実演では操作は一瞬
学生の操作が見えにくい
手の動きがズームで大きく

■ 作成した動画教材

3年次 微生物学実習	2年次 生化学実習	1年次 基礎科学実習
<ul style="list-style-type: none"> 動カビベットの包み方 (1分02秒) アグロペリコロト培地の作り方 (3分28秒) 試験菌調 (3分49秒) 高次平板培地への菌線塗抹 (5分33秒) バクテリオファージの検出 (1分48秒) 革菌色グラム染色 (11分51秒) E. coli の液体培養 (1分51秒) 変異原性試験 (3分58秒) 毒性感受性測定 (5分19秒) 生体数算 (6分18秒) 菌落試験 (2分18秒) 	<ul style="list-style-type: none"> 薄層クロマトグラフィーによる脂質の分離と測定 (4分 8秒) SDS-PAGE/アクリルアミドゲル電気泳動法(SDS-PAGE) (4分15秒) ニトロセルロース膜への転写 (3分37秒) アガロースゲル電気泳動法 (2分12秒) 酵素反応の産物検出剤 マイクロビクターの使用法 (1分47秒) ピペティング/タッピングのやり方 (0分28秒) 	<ul style="list-style-type: none"> 実習を始めるにあたってビーカーの取り扱い (2分18秒) 安全ピペッターの取り扱い (2分04秒) 濡れたビーカーの取り扱い (1分10秒) 動カビベットの取り扱い (0分43秒) メスフラスコの取り扱い (2分03秒) 器具の洗浄方法 (1分45秒) 天秤の取り扱い (2分18秒) ローターの取り扱い (2分46秒) 分光光度計の取り扱い (2分07秒) マイクロビクターの取り扱い (2分11秒) 菌落数の取り扱い (2分11秒)

■ 動画教材の例示(3年次 微生物学実習・無菌試験)

アンブル室の菌針操作でガラスの切り口によって感染する学生がいなかった。

■ 動画教材で説明を受けた学生の反応(2年次 生化学実習)

Q1: 動画教材の取扱いと実演とでは、どちらの説明を受けたいですか? (n=369)

Q2: 動画教材を見て、手順を記憶できましたか? (n=369)

Q3: 動画教材をMoodleなどで視聴できたら、学習や復習に役立つと思いますか? (n=369)

■ 実習中自由に視聴できる iPad を導入

学生のコマンド(抜粋)

- ・iPadを使って、動画を自由に止めたり進めたりできるのがとても便利。
- ・iPadで動画教材を自分で再生できるシステムはよい。
- ・実習中にiPadで確認でき、非常に助かった。
- ・iPadがとても見やすかった。
- ・iPadが役に立ったので、各フラッシュごとに置いてほしい。

■ 事前学習教材として活用(1年次 基礎科学実習)

実験器具や機器の使用方法をイメージする

Q1: Moodleの動画教材は視聴しましたか? (n=385)

Q2: 動画教材は実習に役立ちましたか? (n=387)

■ PDCAサイクルによる学修環境の向上

学生が実験実習時間を科学・技術学修の場として自覚して主体的に実験に取り組みよう、動画教材を開発し、実験操作説明に活用した。3年次 微生物学実習では、以前に比べ明らかに、切り替えや火事の件数が減少した。実験終了後のアンケート調査で、ほとんどの学生が動画教材を使った説明で実験操作を理解できたと回答した(2年次 生化学実習)。さらに、ヒアリング調査で、iPadで動画教材を自由に視聴できることが好評だった。また、学習管理システムMoodleにおいて、自由に視聴できる環境を整備した。これにより、約半数の学生が、動画教材を事前学習教材として活用した(1年次 基礎科学実習)。予習動画の視聴を前提にして実験実習を実施することによって、予習先行学習習法を学び、これまで「学び方」がわからず実習への参入ができていない学生に対して「学び方」を学ぶというメリットも期待される。今後は、動画教材に対する学生と教員のコメントを精査し、動画および視聴方法の改善と、また動画教材が出来ていない実習科目には、動画教材の作成と導入を進めたい。

15. 同志社女子大学

テーマ	北海道富良野地域における地域連携を通した総合的な地域学習の取り組み	
発表代表者	天野 太郎	
キーワード	観光	まちづくり
	中心市街地活性化	防災教育
発表の概要	<p>本学では 2005 年から北海道富良野地域を対象とし、毎年 1 週間程度現地に滞在しながら観光や地域形成を中心として多角的な視座から授業を行ってきた。その取り組みの経緯や現状を紹介しながら、2016 年に発生した水害に代表される防災教育としてのあり方、また中心市街地の活性化への取り組みといった課題について報告を行う。</p>	

北海道富良野地域における地域連携を通した総合的な地域学習の取り組み
同志社女子大学・現代社会学部社会システム学科 天野太郎

1: はじめに 報告の目的

本報告は、2005年度から本学で実施している地域連携型授業(富良野)を取り上げて、プログラムの現状とその特徴を報告する。また、地域連携型の教育プログラムとしての課題と展望について報告を行うものである。

2: 授業プログラムの概要

◎地域連携型教育プログラム「インターシップⅡ」は、地域に密着し、地域の問題解決型の実践的授業
◎毎年8月～9月の7泊8日、現地滞在を行い調査・学習
◎対象学年は3年生以上、18名定員で実施

3: 問題意識の変化

「観光」を中心としたプログラム(2005年～2009年) 本学科内「京都学・観光学」コースに対応
観光地としての富良野
中富良野町「ファーム富田」を主体として実施
本学と連携「ラベンダー」観光の創出を富田町と協働

→ 課題の変化 →

1. 富良野地域の観光入込客数の減少
2. ファーム富田の受け入れ態勢の変化
3. 授業担当者の変更

→ 2010年から、「観光」から「まちづくり」・「地域活性化」を中心テーマをシフト

◎自然観光資源から、ラベンダー、フィルム・ツーリズム(「北の国から」・「風のガーデン」ロケ地)、食観光(オムカレー)、環境保護観光へと、つねに新しい資源を、持続的に生み出してきた富良野という場所の持つ力

◎地域住民自身が活性化し、稼ぐことで、地域の魅力が増加。その動きこそが地域の魅力となる

↓

学生と地域住民が交流しながら 女子大生の視点からのまちづくりを提唱・発信!

4: 2016年度実施のプログラムの特質

①北海道富良野地域の形成について現地でまなぶフィールドワークの実践

◎商店街・商業施設(フランマルシェ)での調査～商店街側のフィードバック
◎東京大学北海道演習林での自然環境学習を共同実施
東京大学演習林→払い下げて富良野地産開発の歴史
演習林「林分調査法」・・・持続可能な森林管理の保全と活用

②地域を学ぶ力…富良野の地域振興について、観光学・経済学・地理学・文化学・まちづくりなど複合領域からの地域理解のまなざし
社会システム学科のまなびのシステム(5つの学問的な広領域)との連携

③地元の高校生・地域住民との協働プログラム
北海道富良野緑峰高校「カレンダー娘」地元の農産物の発信プログラムに参画

富良野オムカレー 地域の食材を活かした食の文化発信・活性化プログラム
* 地元の高校生が主体的に活動・農林水産省 地域地産物優良活動表彰受賞(H28)など注目される

④発信する力…中心市街地の活性化・まちづくりの諸課題
富良野市議会・SNS・市民ホールにて発信 市民との交流の場
地域行政への具体的なプレゼンテーション

5: 今後の課題と展望

持続的な教育プログラムを継続していく上で、地域と連携した授業運営を行う上で以下のような問題が今後の課題ならびに懸念として指摘できる。

◎地域連携一地域への可視的・継続的な「メリット」の提供
現在は学生との交流・授業・活動への影響で実現
* 変化する地域のニーズに対する教員・大学の「力」の必要性

◎多世代型交流への可能性
地域住民「観光」のまちから「少子高齢者」の問題
* 授業としての時間数、学生の継続的な関わりを創出

◎多地域間交流への可能性
富良野と東北被災地(別教育プログラムとして実施)との関わり
被災者の方々の移住
* 富良野の中心市街地活性化・・・全国でも先進的なまちづくり-H28年 第5回まちづくり法人国土交通大臣表彰

◎ 京都の中心市街地活性化の問題や、被災地における新たなまちづくりともリンクさせて教育・研究が可能な舞台

16. 福知山公立大学

テーマ	大学の地域密着型 PBL による地域資源開発 -福知山市での「竹林と光のプロムナード祭」開催をとおして-	
発表代表者	平野 真	
キーワード	地域密着型 PBL	地域資源開発
	福知山市	ソーシャル・キャピタル
発表の概要	福知山公立大学の4年生の1年間の教育プログラムとして、地域密着型 PBL による活動を行った。内容は、地元の竹林の自然保護、観光イベントの開発、地元小中学生の郷土意識の醸成、地元の伝統工芸である和紙の文化交流と産業振興、などの要素を組み合わせ、地元由良川のほとりにある蛇ヶ端竹藪（通称明智藪）を整備し、地元の和紙を使った灯籠を大学生の指導のもとに地元小中学生と共に制作し、9月17日に青年会議所が主催して行う「三日天下」というイベントと連携して、竹林の周辺で灯籠を飾る夜のイベントを開催することである。このイベントに向け、大学生に嵐山の観光の工夫を学ばせるなど、内発的な気づきを促し、多くの人との協働を通じて、社会性の促進も行った。大学での人材育成と、地域の観光資源開発という課題に向けた実務的活動との関係について考察した。	

大学の地域密着型 PBL による地域資源開発 -福知山市での「竹林と光のプロムナード祭」開催をとおして-



福知山公立大学地域経営学部 平野 真

対象：福知山公立大学4年生

目的：1) 地元の竹林の自然保護、

2) 観光イベントの開発、

3) 地元小中学生の郷土意識の醸成、

4) 地元の伝統工芸である和紙文化と地域産業の振興、

5) 市民との協働による大学生の内発的成長、社会意識・主体的行動力の醸成

内容：地元由良川のほとりにある蛇ヶ端竹藪（通称明智藪）を整備し、地元の和紙を使った灯籠を大学生の指導のもとに地元小中学生と共に制作し、9月17日に青年会議所が主催して行う「三日天下」というイベントと連携して、竹林の周辺で灯籠を飾る夜のイベントを開催する

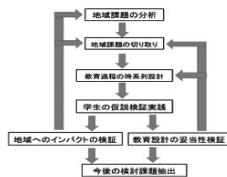


図1. 教育の意義と設計

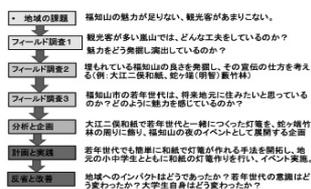


図2. 具体的な教育プロセス



図3. 実践の様子(写真)

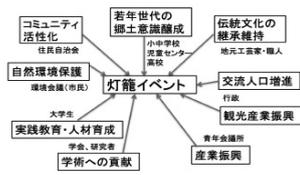


図4. 活動の連携・協力先

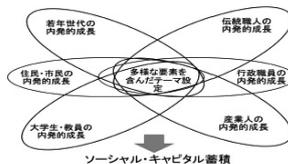


図5. 結果として得られた地域の社会資源

17. 龍谷大学

テーマ	大学コンソーシアム京都を活用した「初級地域公共政策士」の共同開発	
発表代表者	村田 和代	
連名発表者	久保 友美	
キーワード	地域公共人材	地域公共政策士
	アクティブ・ラーニング	京都府北部地域
発表の概要	<p>京都では、地域の課題解決を目指す人材「地域公共人材」の育成を目的とした大学院レベルの地域資格「地域公共政策士」が2011年度より産学公民の連携のもとスタートしました。2014年度からは地域連携型のアクティブ・ラーニングを主軸に据えた学部レベルの「初級地域公共政策士」が加わり、100人以上の資格取得者が誕生しています。しかし、資格教育プログラムは特定の大学・学部でしか受講できないことが課題の一つとして挙げられておりました。</p> <p>そこで2016年度は、大学コンソーシアム京都「ブラザ推奨科目」を活用し、大学や学部にかかわらず受講ができるアクティブ・ラーニングプログラムの共同開発を実施しました。2017年度からは、アクティブ・ラーニングだけでなく座学科目についても大学コンソーシアム京都の単位互換科目として提供をし、大学や学部にかかわらず「初級地域公共政策士」が取得できる仕組みを整えていく予定です。今回はその概要や今後の展望について発表いたします。</p>	

大学コンソーシアム京都を活用した「初級地域公共政策士」の共同開発

龍谷大学、京都大学、京都府立大学、京都産業大学、京都橋大学、同志社大学、佛敎大学、京都文教大学、福知山公立大学

「地域公共政策士」とは？

- ◎COLPU(地域公共人材開発機構)が「地域公共人材」としての能力を認定する全国初・京都発の職能資格です。
- ◎地域公共政策士は、京都府内の大学・大学院、自治体、NPO、経済団体等の連携事業「地域公共人材大学連携事業」によって、平成23(2011)年度から大学院修士レベルの資格制度としてスタートしました。
- ◎地域公共政策士を運用する中で、学部レベルへの拡充のニーズが高まり、平成26(2014)年度からは新たに学部生を対象とした「初級地域公共政策士」の運用がスタートしました。
- ◎資格を取得するには、各大学の提供する資格教育プログラムに必要な科目を履修・単位の取得後にCOLPUに資格発行申請をすることで、取得できます。
- ◎地域公共政策士のレベルは、EUの教育・職能資格で用いられる欧州資格制度枠組み(EQF=European Qualification Framework)とも参照できるようにしており、グローバル化に対応した資格となっています。

初級地域公共政策士
(学部レベル)

地域公共政策士
(大学院レベル)

キャリアスタートプログラム
(学部レベル)

地域公共政策士
(大学院レベル)

「初級地域公共政策士」でどんな力が身に付くのか？

課題発見力: 地域に根ざした課題を見つけ出ししていく力
 課題共有力: 地域の課題に対して、チームで課題解決に取り組む力
 課題分析力: 発見された地域の課題に対し、多角的に分析していく力

「初級地域公共政策士」のメリット？

- ①地域で活躍できる力を身につけることができます。
- ②大学での学びを深め、公共性・市民性を養うことができます。
- ③資保証された資格であり、自分の得た力を社会的に証明することができます。

課題

- ・資格教育プログラムを提供する大学の特定の学部には所属していないと資格を取得することができない。
- ・資格制度を京都府内に広めていくためには、京都府内の大学生が受講しやすい仕組みづくりが必要

初級地域公共政策士(地域公共政策プログラム)の開発

大学コンソーシアム単位互換科目としての提供

○◎大学:A科目	◎◎大学:E科目	ブラザ推奨科目
△△大学:B科目	△△大学:F科目	△△大学:アクティブ・ラーニング
□□大学:C科目	□□大学:G科目	□□大学:アクティブ・ラーニング
◎◎大学:D科目	◎◎大学:H科目	

基礎科目群 4ポイント以上 応用科目群 4ポイント以上 アクティブ・ラーニング科目群 2ポイント以上

合計 12ポイント

- ◎これまで「初級地域公共政策士」資格教育プログラムとして9大学が提供してきた科目を大学コンソーシアムの単位互換科目として提供し、新し「初級地域公共政策士(地域公共政策プログラム)(仮称)」の開発を進めていく。
- ◎3つの科目群(基礎科目群、応用科目群、アクティブ・ラーニング科目群)によって構成する。
- ◎大学コンソーシアム京都のブラザ推奨科目である「地域公共人材特別講座(PBL入門)」をアクティブ・ラーニング科目群の科目の一つとする。
- ◎今後、大学の枠を超えたアクティブ・ラーニングの科目の共同開発も検討を行っていく。

18. 大学コンソーシアム京都

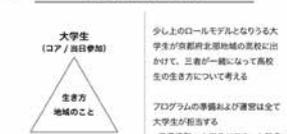
テーマ	複数大学大学生による過疎地域高校生との対話授業 「まるっと〜く」の2年間の成果と課題	
発表代表者	筒井 洋一	
連名発表者	遠藤 龍	上田 和希
キーワード	キャリア教育	大学生
	高大連携授業	対話型
発表の概要	<p>京都府北部には大学が少なく、高校生が将来を相談できる若い相談相手が少ない。2012年から、大学コンソーシアム京都では、京都府北部地域の高校に向けて、高校生よりも数年年上の大学生や地域の人と将来について語る授業を提案し年間1〜4校で実施してきた。この授業のことを高校生が大学生などと輪になってゆったりと話すことを象徴する名称として、「まるっと〜く」と名付けた。</p> <p>プログラムでは高校生の進路意識を高め、地域資源の大切さを認識してもらうことを目的としている。プログラムは高校や高校生とのニーズに基づいて、各校毎に独自プログラムを組み、1泊2日のプログラムの作成者も、大学教員ではなく、大学生の中心メンバーが作成している。これに関わる教員、大学生、高校、高校生、地域という異なるステークホルダーがどのように変容し、何を達成したのかについて企画責任者である教員と、中心メンバーである大学生の視点から、「まるっと〜く」の2カ年の成果と課題について論じる。</p>	

1 高大連携授業としてのまるっと〜くとは



京都府北部の大学で構成されたインターカレッジの授業であり、高校と大学という異なる枠組みを超えた、地域に開かれたプロジェクトである。

2 大学生 x 高校生 x 地域



少し上のロールモデルとなりうる大学生が京都府北部地域の高校に出かけて、三者が一緒に考えて高校生の生き方について考える。

プログラムの準備および運営は全て大学生が担当する

- ・準備段階：大学3コアチーム教員
- ・当日：コアと当日参加大学生

3 二年間のあゆみ (2015年度)

まるっと〜く in 久美浜	まるっと〜く in 大江
日時：2015年2月11日 場所：久美浜高校 高校生 22人、大学生 18人、地域社会人 8人 企画の狙い：「目指す学校、しびへの学び」をいかに実現するかが課題となる。5シブに思いをめぐらす。	日時：2015年3月12日 場所：大江町 道の交流センター 高校生 13人、大学生 10人、地域社会人 8人 企画の狙い：「高校生も社会を学ぶ」をテーマに、5シブに思いをめぐらす。



4 二年間のあゆみ (2016年度)

まるっと〜く in 網野	まるっと〜く in 瀬田
日時：2016年9月30日 場所：小浜高子センター 高校生 30人、大学生 11人、地域社会人 3人 企画の狙い：「ふるさと」をテーマに、5シブに思いをめぐらす。	日時：2016年12月15日 場所：瀬田市庁舎 高校生 12人、大学生 6人、地域社会人 4人 企画の狙い：「大学生の学び」をテーマに、5シブに思いをめぐらす。



5 二年間のあゆみ (2016年度)

まるっと〜く in 久美浜	まるっと〜く in 大江
日時：2016年11月12日 場所：久美浜中学校 高校生 13人、大学生 9人、地域社会人 3人 企画の狙い：「学びの場」をいかに実現するかが課題となる。	日時：2016年12月16日 場所：大江大 道の駅 高校生 20人、大学生 9人、地域社会人 8人 企画の狙い：「高校生も社会を学ぶ」をテーマに、5シブに思いをめぐらす。



6 昨年度から今年度への変化

(ア) 大浜田町 青年センター、今年度4回

(イ) 大学生チームの運営の自立化が進み

(ウ) 地域社会人の高校生に対する見方の変化

教えるモード→学ぶモードへの変化

(エ) 大学生コアチームと当日参加大学生との結びつきが強く、より一歩的企業連携が可能となった。

(オ) 大学生自身の生き方、キャリアに対する意識が育つようになった。

(カ) 大学生企業に働きやすくなる環境が改善し、高校生を育てるようになった。

(キ) 企画づくりの過程において、具体的な生徒の存在が見えるようになってきた。

7 今年度4企画の中での変化

(ア) 地域社会人が参加出来る企画づくりの実現 (網野/瀬田→大江)

(イ) 参加による地域社会人の気づき (網野/瀬田→大江)

(ウ) コアチームが準備した内容をそのまま実施する状態 (網野) から、当日参加大学生も突入してより連携した内容を企画し、実際の会の進行まで担えるようになった (大江)

8 今後の展望

(ア) 高校生コアチーム
→高校生と共同での企画作り

(イ) 大学生向けブランディング
→学びと探求を軸としたプログラムとして大学生を募集し、継続的な参加を促す

(ウ) 他の動きとの連携
→まるっと〜く事業自体ではなく、関西に数多くあるPBLや学びのプログラムと連携して大学生を募集する。

19. 大学コンソーシアム京都

テーマ	SD ゼミナールについて －次世代の大学運営を担うプロフェッショナル職員の育成－	
発表代表者	村山 孝道	
連名発表者	物部 剛	
キーワード	SD	人的資源管理
	高等教育	
発表の概要	<p>2017年度から大学設置基準の一部が改正され、いわゆる「SDの義務化」がなされる。SD義務化の意図は、学長がリーダーシップを発揮し、大学運営の一層の改善・充実を実質的に実現するための補佐機能を高めることにある。法改正における職員（スタッフ）には、職員だけでなく、副学長や学部長など、マネジメントに携わる教員身分も含まれる。</p> <p>大学コンソーシアム京都では、SD義務化に先立ち、2015年度からプロフェッショナル職員の育成を目的とした、少人数ゼミナールスタイルの研修を立ち上げた。加盟校を中心とした中堅・若手大学職員をメインターゲットに、有識者による約2単位相当分の多様な連続学習を提供している。ほぼ毎回課される課題、一般公開のプレゼンテーション、1万字程度の最終レポートなど、それなりの負荷があるプログラムとなっている。</p> <p>SD ゼミナールの概要と、2015年、2016年の2期の実施を踏まえた成果を発表する。</p>	

ポ
ス
タ
ル
シ
ョ
ン



SD ゼミナールについて

－次世代の大学運営を担うプロフェッショナル職員の育成－

研修の目的

- ① 大学職員として必要な知識・技能を体系的に習得できるカリキュラムを提供し、今後の大学運営を担うプロフェッショナル職員の育成を目指す。
- ② 5年以上の職務経験（その内、大学職員としての職務経験が2年以上）の職員を対象とし、入学プログラムを目指す職員の導入的研修プログラムとする。
- ③ 加盟校が大学の特色を継承した人的ネットワークを形成し、所属大学において、今後の大学運営や交流のパートナーとなるような機会を提供する。

研修の到達目標

- ① 大学職員として必要な基礎知識（高等教育制度、学生実態の把握、大学と社会との関連等）を習得する。
- ② 各大学の職員と共に学び、情報交換することを通じて、自大学と異なる事例や取組みに関する見識を深める。
- ③ 受講生間で親交を深め、大学の特色を継承した人的ネットワークを形成する。
- ④ 幅広い切磋琢磨する環境の中で、職員として自律的に学習・考察する態度を身につける。

修了要件

原則として、下記の全ての条件を満たした受講生に「修了証」を授与する。
 ① 公開プレゼンテーションを含む講義を10のうち、6回以上の出席
 ※公開プレゼンテーションには随時参加すること
 ② 修了レポートの提出

修了レポートについて

テーマ・各自テーマを設定
 分量：A4横書き40字×35行、6ページ以上10ページ以内(図表・参考文献を含む)
 締切：2017年10月末

参加費

加盟校職員：30,000円 / 非加盟校職員：60,000円

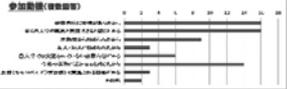
2017年度研修内容

実施日	内容	講師等
6/3	① オフエンターテインメント 兼 施設ガイドツアー ② SDゼミナールにようこそ	① 大学コンソーシアム京都事務局 ② 山崎 伸也 (京都府国際大学協会企画課次長)
6/10	大学の歴史と創生 ～大学の歴史的發展と大学改革の動向～	江原 誠一 (京都大学名誉教授)
6/17	大学の組織とリーダーシップ ～組織を創出する組織づくり～	坂本 博典 (現職 大阪府立大学システム系教授)
6/24	大学職員と「こころ」 ～花園大学での実践研修～	小川 大輔氏、トーマス・カシユナー氏 (花園大学国際学研究所研究員)
7/1	大学組織の活性化 ～新しい取り組みの事業化～	瓜生 直子氏 (同志社大学 学芸部 准教授)
7/8	大学と社会連携 高大連携 ～キョー大教育の取組みから、取組効果について考える～	佐藤 昌己氏 (大谷大学文学部教授)
7/15	① アカデミック・プレゼンテーション ② アカデミック・ライティング	① 村山 孝道氏 (京都文教大学教職課程課課長) ② 大学コンソーシアム京都事務局
7/22	大学と社会 ～地域連携の意味と大学の役割～	深見 昌博氏 (龍谷大学政策学部長准教授)
9/9	受講生公開プレゼンテーション	

2015年度

受取費内訳	20代		30代		40代		計
	男	女	男	女	男	女	
国立	0	0	1	0	1	2	
私立	2	0	13	3	2	3	23
計	2	0	17	3	3	6	26

参加者数(性別別)



参加者数(年齢別)



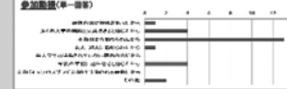
参加者の声

- 京都の大学のユニークな取り組みを知り、感じることができました。
- 改めて職員としての自覚、学ぶことの重要性を再認識できました。
- 是非とも来年また参加したいと考えています。
- 改めて「学ぶ」ということをスタートするきっかけになった。ということが何よりも大きい。メンバーにも非常に感謝し、この学びはこれからも継続して行けるように思う。

2016年度

受取費内訳	20代		30代		40代		計
	男	女	男	女	男	女	
国立	1	0	1	0	1	0	3
私立	2	1	8	4	6	1	22
計	3	0	10	4	7	1	25

参加者数(性別別)



参加者数(年齢別)



参加者の声

- 今回の研修を研修で終わらせたくない。業務に活かしていきたいです。
- 現在の業務への取り組みの不安や自分自身の能力不足を感じることが多くなく、授業への参加がモチベーションが向上してきている。取組を続けていきたいです。実際に受講して、専攻に学ぶことが楽しく、研究を深めたいと思うようになりました。